

主 文

本件上告を棄却する。

理 由

弁護人高垣憲臣の上告趣意について。

被告人は昭和二一年五月六日勾留せられ、同月二九日保釈せられたことは記録上明白である。従つて右勾留による拘禁は、日本国憲法施行以前に既に終了したのであるから、右拘禁を以て、日本国憲法第三四条に反するものと主張する論旨は、憲法に遡及の効果を認めんとするものであつて、法律上、根拠のないところである。のみならず、勾留処分の違法不当に対しては、別途に救済の方法によるべきであつて、右は第二審判決に影響を及ぼさないこと明白であるから、これをもつて、上告または再上告の理由とすることはできないのである。（昭和二三年（れ）第六五号事件、同年七月一四日宣告大法廷判決参照）論旨は理由がない。

よつて刑事訴訟法第四四六条に従い、主文のとおり判決する。

右は裁判官全員の一致した意見である。

検察官 十蔵寺宗雄関与。

昭和二三年一二月二七日

最高裁判所大法廷

裁判長裁判官	塚	崎	直	義
裁判官	長	谷	川	太 一 郎
裁判官	沢	田	竹	治 郎
裁判官	霜	山	精	一
裁判官	井	上		登
裁判官	栗	山		茂
裁判官	真	野		毅

裁判官	小	谷	勝	重
裁判官	島			保
裁判官	齋	藤	悠	輔
裁判官	藤	田	八	郎
裁判官	岩	松	三	郎
裁判官	河	村	又	介